



タオル 厳禁!?
触手 乱交温泉

いやあああああ...
なんですか...

ちよっ
ヤダヤダ!!

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止



～触手温泉～

その湯舟にタオルを巻いて浸かるうものなら
そこに潜む触手たちの洗礼を受けることだろう…



ねえ唯

ここって出るらしいよ？

タオル付けて入ったら
怒って出てくるお化け

何それめっちゃウケる
いるわけないっしょそんな

だよね
誰かさんが覗いてる
かもしれないし
外せないよ

ひっ
ひっ

ズル...

えっ、なににに!?

今なんか
にゆるっとしたのが
手にっ!!



あ…加蓮ちゃん
後ろ…



まさか本当にいるんじゃないでしょうねっ！
なんか気味悪いし出ようよ唯！



え…

後ろ…？

きゃあああああ
あああああ!!



さわら
なごい!!

ちゅ♡

なっ何よこれっ
きもちわるいっ!!





この後湯あたりで
奈緒にめっちゃ怒られた





来た…!!

温泉内で二人きりになるための
下準備はバツチリ



プロデューサーさん…
まだかなあ…



スッポ…

今…!!

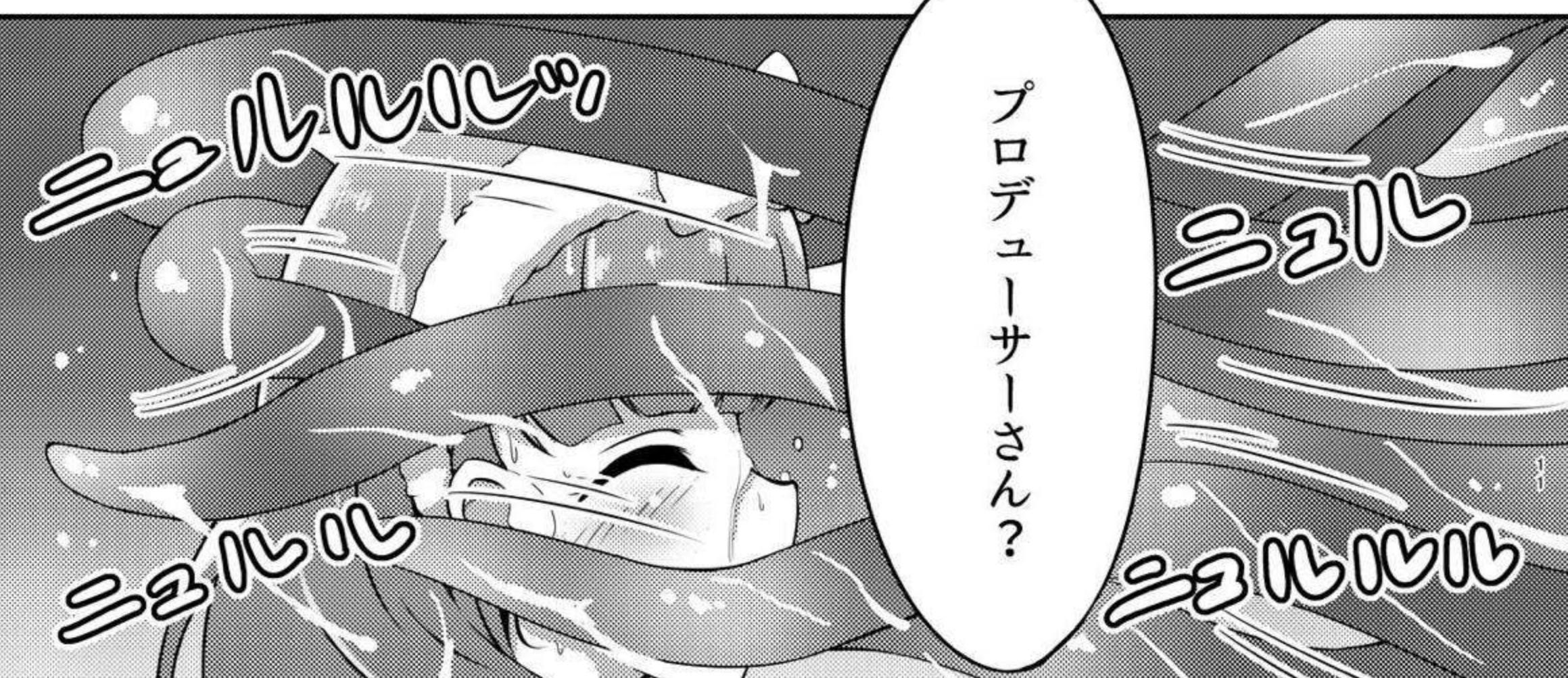


プロデューサーさん

待ってまし—

スッポッ

あとはこうして
岩陰で待つだけ…



いやあああああああつ!!
なんですかこれえええつ!!

アッ

ガッ

ヒッ

ん!!

やだ...まゆの口の中が...
めちやくちやにされてる...

まっ

しゃほ



まゆ...

ん...♡

そんなところまでやられたら...

びしょ

ずぶ

にゅる

にゅる

にゅる

あはっ♡

おかしくなっちゃおう...!!

にゅる♡

あはっ♡

あはっ♡

あはっ♡
あはっ♡
あはっ♡

どぶ

にゅる♡

にゅる♡

びしょ

はあっ♡

あー♡

あ♡

この行為はまゆがのぼせるまで続いた...







いやあつ!!
なんですかこれっ!!

ギョッ...
グッ
グッ

グッ
グッ
グッ

グッ

グッ

グッ



あ

ブル

ブル
ブル

はあ

はあ

はあ

はあ

スリッパ

スリッパ

スリッパ

あ

あ

ガク

ガク

ビク

ズン

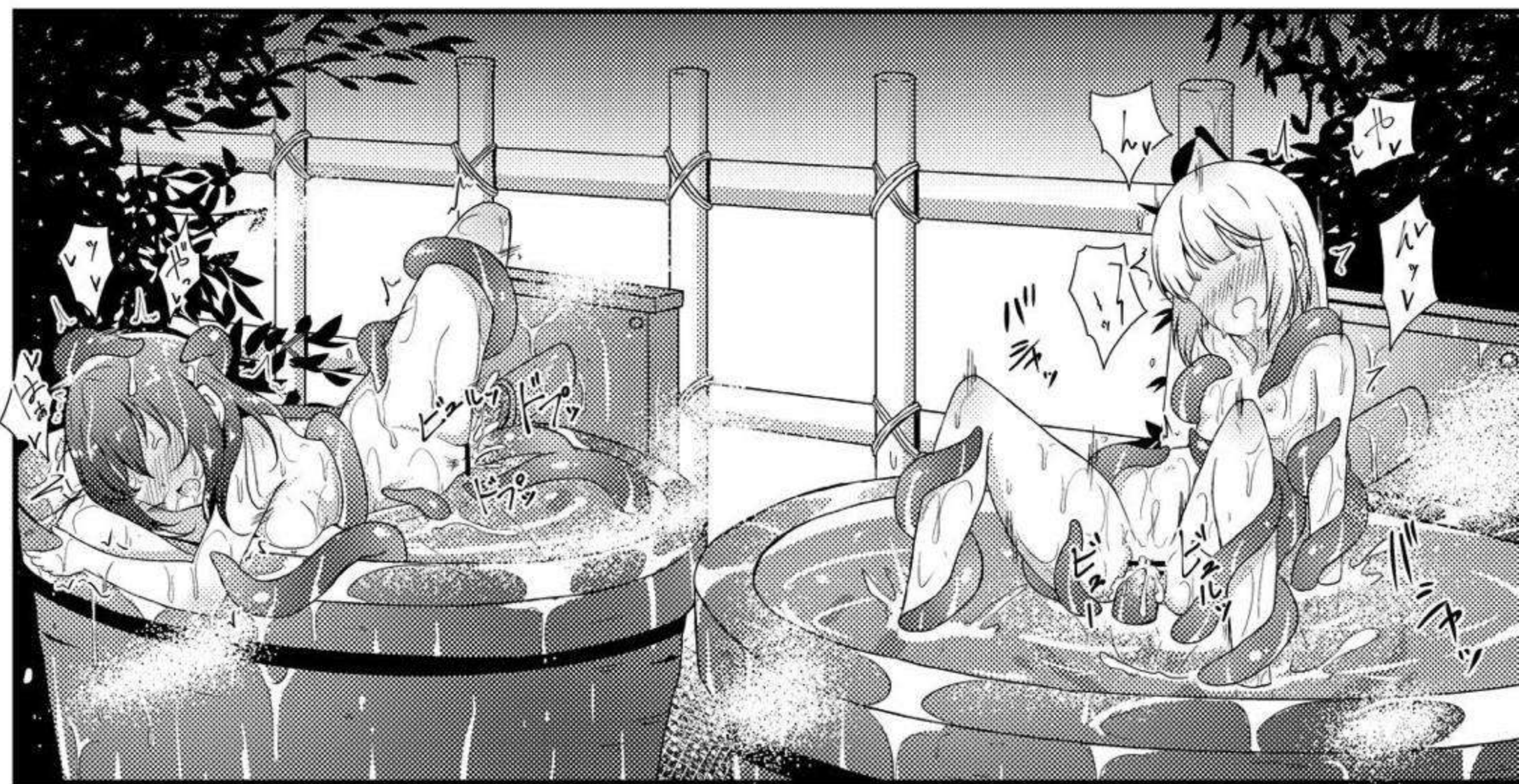
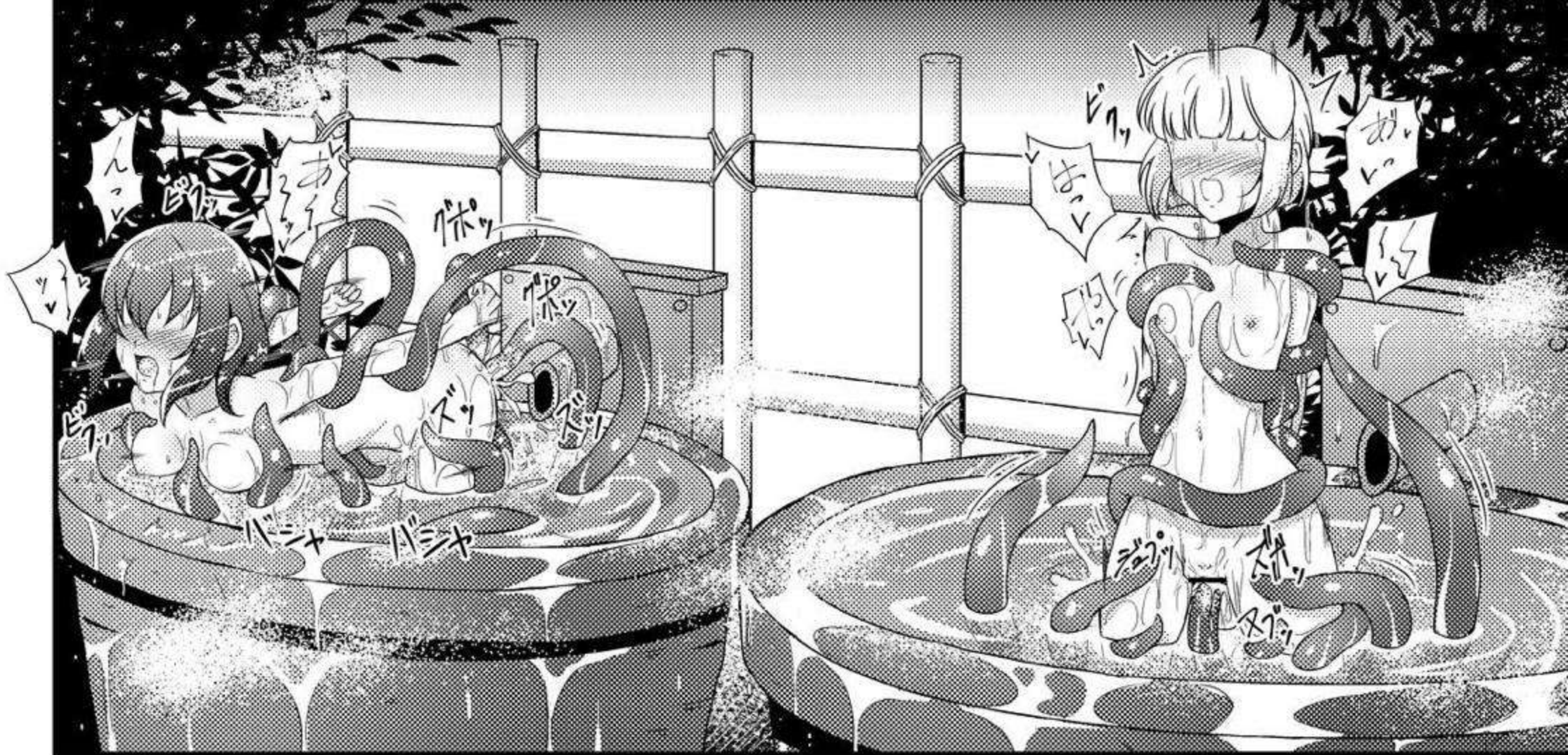
ズン

ズン

ズン

ズン

す
ちん





悪いけど先に
上がるわね、美波



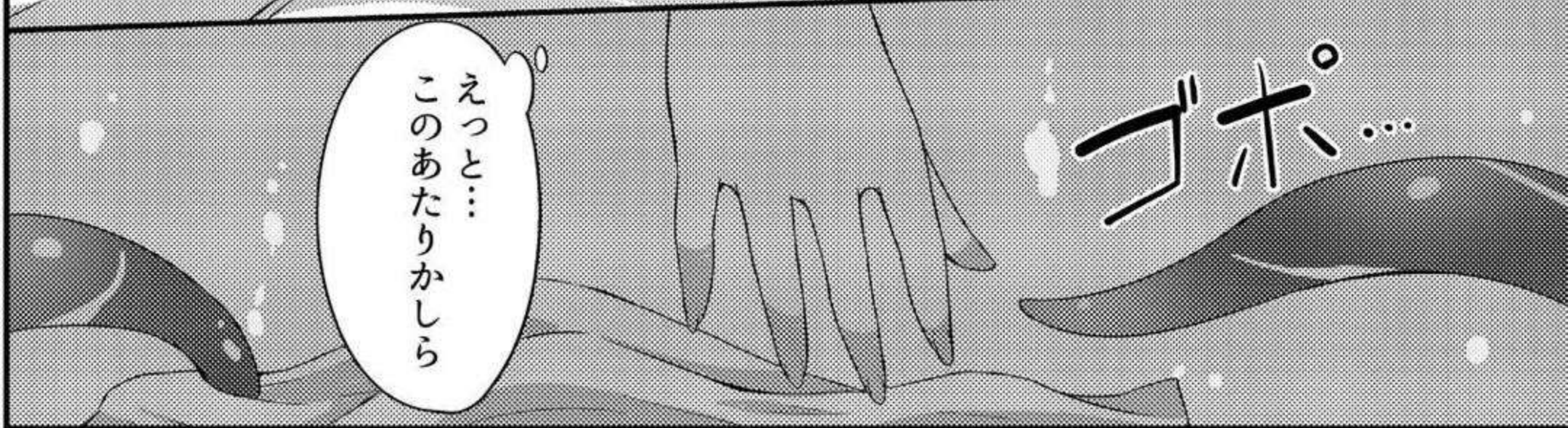
ふう…いい湯だけど
なんだかのぼせてきちゃったわ



あっ
待って奏さん!

……タオル、取れてるよ

あら?





なっ何よ
これっ!?

奏さん!?

アッ

アッ

アッ

アッ



う……

大丈夫……？
奏さん

ズル

ズル

ズル

ズル

ズル……

ズル

!?

は？

ズル

ゴッ

ゴッ

アッ

アッ

……



あっ
あっ
あっ

あんや
んん

ググッ

ググッ

ずちゅ

ずちゅ

ずちゅ

ずちゅ

ズッ

あ
耐え
ない

はげし
二んたの

ずちゅ
ずちゅ
ずちゅ
ずちゅ

羨
美
あ
あ

あ
もう
だめ



後日の収録、表情が艶っぽすぎると
何度もリテイクする羽目になった



湯の中に潜むモノ

山の景色が赤や黄色の色鮮やかな紅葉に染まっていく秋。

小日向美穂は所属するアイドル事務所のある都内から遠く、地元の熊本に一人で降り立っていた。

「はあ……久しぶりの熊本だなあ……」

近いうちに熊本のとある小さな山間の街に新しく開業するという温泉旅館の宿泊体験レポートのお仕事ということで、こうして地元へ帰ってくるようになった美穂。

（でも仕事が終わったらすぐに事務所に戻らないといけないから、あんまりゆつくり出来ないだろうなあ□）と思っていたところ、プロデューサーから『正月に仕事入れすぎて帰省させてやれなかったから』と、地元で過ごすオフの期間も数日貰っている。美穂の表情がいつもよりも緩みきっているのはそのせいだ。

この話を貰ってすぐからずっと何をしようかと悩んでいたが、まずはやっぱり仕事に集中しないと、と気合を入れ直していた。そんなところで今回のお仕事先である旅館の女将さんとその旦那さんのお迎えに合流。早速宿に向けて出発する。

旅館へと向かう車中では、女将さんから今回の仕事場でもある、新たに開業する宿と今回の仕事についての説明を受ける。

まだ工事が終わっていない部分が多いが、自慢の料理と露天風呂は既に楽しめる状態にあるので、まずはそれらをたっぷり楽しんでもらい、その楽しんでいる様子を開業直前にSNS

等に写真付きでアップするための感想等を美穂視点で書いてもらいたい、とのことだ。

「あんまり固くならないで、普通に宿に泊まるときみたいにしてきてくれるからね。」と女将さんが優しく言ってくれるので、美穂も緊張感なく仕事が出来そうだと一安心。長旅の疲れからかいつの間にか眠ってしまった。

「着きましたよ、美穂さん、起きてください？」

「んう……んあ……？……あっ！ご、ごめんなさいっ！私、寝ちゃって……」

女将さんに起こされた時には車は宿の玄関の前で止まっていた。紅葉が見事な木々の中にひっそりと佇む立派な建物。都会の喧騒から遠く離れた山間の中で、日本の古き良き時代を再現したという宿は、まるで時間をかなり巻き戻したかのようだった。

「わあ……すごい……綺麗……」

「さあどうぞこちらへ。」

案内されるがままに広い廊下を歩く。確かにまだ飾り付けがされていない分殺風景なところもあるが、それでも雰囲気は最高にいい。あちこちから木材独特の良い香りもしていて、気持ちも凄く落ち着く。女将さんに案内された部屋も、一人で使うには十分過ぎるほど広く。窓からの景色もまた一人で楽しむには贅沢すぎるものだった。

「内湯の方はまだ工事中なので、当宿自慢の露天風呂を使ってください。そちらの景色もきつと驚かれると思います。準備は出来てますから、今からでもどうぞ。何かありましたら、玄関すぐのカウンターに居ますので、いつでもいらっしゃってください。」

「はいっ。ありがとうございますっ。」

女将は美穂にそう言い残して去っていった。美穂は軽く部屋と窓の外の景色の写真を撮ってから、早速着替えを取り出して露天風呂へと向かう。

「……あれっ？タオルが……」

脱衣場で下着まで脱いだところで、身体に巻く大きなタオルがないことに気づく。これじゃ写真が撮れないし、一旦服をもう一度着て女将さんのところへ……と思ったところで気がつく。

（あつ、そっか。他にお客さんは居ないし、今回のお仕事は『私視点の感想』だから、私が写ってる必要はない、ってことかな……せっかくの貸し切り状態だし、写真や映像に写るわけでもないから……このままでもいいよね。）

美穂はそのまま身体を洗うためのフェイスタオルを片手にし、露天風呂へと続く扉をカラカラと開く。

「すっごくいい！広～い！」

目の前に現れたのは、まるで小学校のグラウンドのように、広々とした空間にたくさん種類の湯船が用意された露天風呂。葉が綺麗に染まったイチョウやモミジの木々の美しい森の景色も抜群。女将曰く、春になれば桜が綺麗に咲き誇るといふ並木道も見られると言う。

そんな景色に見惚れているところに吹いてきた秋風が肌寒い。美穂は流し場へと向かって身体をささっと洗い流す。それからいくつもある湯船を一つ一つ楽しんでいくことにした。

まずは一番近くにあったよく見る石造りの湯船。張られた湯もよく見る普通の透明なお湯だが、とりあえず一旦身体を温めようとゆっくりと腰を下ろしてお湯の中に入っていく。

「んんっくっく！少し熱いけど、気持ちいい……」

肩までお湯に浸かって息を吐いてリラックス。いい景色の中こんな広い露天風呂を独り占め。普段恥ずかしがりなところのある美穂だが、両足を伸ばして開放感にも浸りきっていた。普通であれば隠しているであろう胸なども曝け出してしまっているが、他に誰も居ないし、誰からも見られないという安心感があるからこそだった。

ある程度身体が暖まってきたところで美穂はその湯船から出て、他の湯船も楽しんでみることにする。一人用の樽風呂や、夜になると星が綺麗に見られると言う寝湯、絶景をより楽しめるようにと少し高いところに作られた展望湯船。

いろんな湯船を試して温泉を楽しむ美穂が次にやって来たのは濁り湯の湯船。真っ白なお湯の中にゆっくり入り、腰を下ろしてリラックスする美穂。他のお湯と違い、少しぬるめのお湯に浸かっているうちに、ついうとうとし始めてしまう。そんな美穂を狙っている存在があるのに気づけないまま。

「んう……んっ、えっ、な、につ、ひゃああっ!?!」

無防備に眠りかけていた美穂の両手両足に無数の触手達が一斉に巻き付いて美穂を捕らえる。そしてそのまま戦利品を掲げるように湯船の上空へと持ち上げ、更に両手両足を大きく開いて「大の字」になるように晒す。

「なにこれっ!?! いやあっ! 離してっ!!」

必死に抵抗するも触手達は意に介さない。それどころか美穂のまだ成長を予感させる胸を強調するかのよう、胸のあたりにも大量の触手達が巻き付き始めていた。

「ひっ……や、やだっ、そこはっ……!」

そして更に白く濁った湯船の中から、巻き付いている触手達と比べて一回りか二回りか太い触手が現れ、美穂の陰部を撫でるように這いずり始めた。

ところどころにある極小さな突起が美穂を刺激する。おまけに触手からなにやらぬるぬるした分泌液を塗り付けられていた。

「や、やだあ……離して……」

必死の抵抗も虚しく湯船の上空で空を切るだけ。陰部を刺激する触手から与えられる不快感が美穂を絶望させていた。

「んぎいつ……あっ、あああ……っ!」

自体は更に悪化する。陰部を這っていた触手が美穂の子宮を指して遂に侵入を始めたのだ。美穂の処女膜は一瞬にして貫かれてしまい、膣内の奥まで触手の侵入を許してしまう。

「やだあ! やめっ、んあああっ!!」

美穂の膣内への侵入を果たした触手は、未開発のそこをまるで整地するかのよう、ウネウネと出入りを繰り返して這い回る。その度に上下に揺すられる美穂の身体。触手達に巻き付かれて強調させられた胸もそれに合わせてぷるんぷるんと揺れていた。

「いやあ……もういやあ……んぶうっ!?!」

無残に触手達の餌食になり泣き出しそうな美穂。しかし触手達は止まらない。美穂の口にも別の触手が入り込み、口の中でも這いずり回る。胸はもちろん、お腹、太もも、お尻なんかを撫で回すように這いずり回る触手も居た。

そして遂に美穂を犯す触手達の狂乱の宴の盛り上がりが最高点到達することになる。

「い、一番奥まで入って来てるっ……このままじゃ……!?!」
「んんっつー!!んぶっ、んんっー!」

触手が美穂の子宮口に到達したかと思えば、すぐにそこを押し広げて子宮内へ侵入、直後にその先端から体液を子宮内へ大量に放出したのだ。口の中に入っていたものや、全身を這い回っていた触手達もほぼ同時に体液を噴射。美穂の身体は白いベトベトした触手達の体液で汚されてしまった。

「んぶっ、げほっ……あ、あああ……」

口から触手が抜かれた美穂だったが、もはや言葉を発する気力も残っていないほど絶望していた。相変わらず触手達は離してくれる気配もなく、今もまだ美穂の身体を舐めるようにして這い回っていた。子宮内へたっぷり体液を放出した触手が美穂の中から出て来た。ゴポツツと言う音と共に、中から白い体液が逆流して溢れ、真下の湯船にポチャンと音を立てて落ちる。それを合図にしたかのようにな別の触手が湯船から現れたかと思えば、それはすぐに美穂の中へと侵入を始めた。

「もういやあぁっ!!助けてっ!助けてプロデュー……んぶうっ!?!」

子宮を指して侵入してきた別の触手に再び突かれ始める美穂。助けを求めるその悲鳴は虚しく山に響き、途中で触手に遮られてしまうのだった。

「プロデューサーさん、美穂ちゃんの到着って何時か聞いてませんか?響子ちゃんと空港まで迎えに行こうって話してて……」
「ん?そう言えば聞いてないな。前日になつたら連絡するって言ってたんだが……」

事務所で美穂の帰りを待つプロデューサーとユニットの友達が異変に気付いたのは、美穂のオフが終わる予定の前日。美穂が熊本に到着してから十日程が過ぎた頃だった。

その頃美穂は、あの宿の地下で捕らえられ、触手達から栄養を与えられて生かされていた。

「あ……なかで……うごいて……」

腹部は妊婦のようにぽっこり膨らみ、触手の幼体が産まれ落ちるのも時間の問題だった。

「御主人様もこの苗床にはご満足してただけたようですね。他にも数人捕らえる予定がありますから、ご期待下さい……」

美穂の様子を満足そうに眺める、宿の主人に化けていた触手達の親玉である化け物と、それに裸で奉仕する女将の姿がそこにはあった。

その後、美穂が事務所に帰ってくることはなく行方不明扱い。この偽の宿も見つからないまま、犠牲者は更に増えるのだった。



あ と が き

ゲスト原稿でお世話になりましたBlackCiderと申します。
Pixivの片隅でひっそりと執筆活動をしているところに
お話をいただき、こうして同人誌童貞を捨てることになりました。
なんとなくステージに引っ張り出される森久保の気持ちがわかった気がしました。
「前置きが長い」と天狗の面を被った人からビンタされそうな
SSでしたがお楽しみいただけていたら幸いです。ありがとうございました。

BlackCider

こんにちわ、ガジランドのガジラビュートです。
とうとう出すことが叶いました、アイマスにて触手本…!!
新型コロナに折れることなく本を書き上げることが出来ました。
二度のイベントの中止と欠席を経てようやく叶ったサークル参加、厳しい情勢ながらも
イベント開催に踏み切ってくれた運営には感謝しかありません。
前置きはさておき今回の本は描きたいアイドルで描きたいシチュエーションを好き放題
描かせてもらいました。
触手とは縁のない世界の子たちが突如現れた非日常的存在に蹂躪される姿は非常に
興奮しますね、ステージ上では輝く存在のアイドルたちも触手からすればか弱き獲物も
同然、ひたすら犯されるのみ！です。

始まりは一年ほど前に触手に襲われる唯と加蓮のタイトルで一枚絵を描き、それからそれを見
てくださったBlackCiderさんが温泉触手のSSを執筆してくださったところからだと
思います、それからお題箱等で何回か温泉触手のイラストを描いてるうちに本にして出し
てみたいと思ったわけでございます。みなさんの反響にも感謝…!
そうしてゲストにBlackCiderさんを招き、念願のSSの挿絵を描くという夢も叶って最高の
一冊に仕上げることができました。
ゲストのBlackCiderさん、ありがとうございました。

ではまた次回のイベントも無事に迎えられるように……

2021年2月 ガジラビュート

■奥付

発行日 2021/2/21(シンデレラ☆ステージ9step)
印刷所 栄光様
発行元 ガジランド
発行者 ガジラビュート
TwitterID @GAJIRABUTE(@midnightGAJIRA)
PixivID 3460381
FANBOX <http://gajirabute.fanbox.cc/>



※本書は成年向けです。18歳未満の購読を禁止します。
また無断転載、複製、オークションによる販売などを行わないように
お願いします

